

負けきらい稲荷（篠山町）

文政〈ぶんせい〉三年、今から百五十年あまり前のことです。

篠山藩主〈ささやまはんしゅ〉青山忠裕〈ただやす〉が幕府の老中〈ろうじゅう〉をつとめていた頃、毎年春と秋に、江戸両国の回向院〈えこういん〉広場で大相撲〈ずもう〉が催され〈もよおされ〉ました。

ある年の春場所のことで、はじめの五日間は、いつものとおり篠山藩の力士は、負けてばかりいました。何しろ、江戸の大相撲といえば、名のある力士ばかりで、田舎〈いなか〉力士では勝てないのも無理ではなかったのですが、何分にも負けぎらいの忠裕のこと、毎日ふきげんでした。

ところが六日目になって、「殿、ごきげんうるわしく存じます。これなるは、丹波〈たんば〉の青山家領分〈りょうぶん〉の宮相撲取りで、王地山平左衛門〈おおじやまへいざえもん〉、波賀野〈はがの〉山源之丞〈げんのじょう〉、飛〈とび〉の山三四郎、黒田山兵衛〈ひょうえ〉、曾地〈そうじ〉山右近〈うこん〉、小田中〈こだなか〉清五郎、須知〈しうち〉山道観〈どうかん〉、頼尊〈らいそん〉又四郎と申す者どもでございます。ぜひ、相撲をとらせていただきたい。」と、妙〈みょう〉なかつこうをした八人の力士があらわれました。

普通なら絶対にとらさないのですが、特別に殿のお許しが出たので、しぶしぶとらせたところ、これは、これは、どうしたことか、相撲にならぬ程強くて、その日は全員が勝星〈かちぼし〉という好成績をあげました。おどろいた相手方では、七日目、さらに強い力士を出しましたが、これもバタバタと敗れました。



その日、黒田山兵衛と相手の時汐〈ときしお〉の仕合い〈しあい〉は、ものすごいばかりでした。おわり頃に出た、波賀山源之丞や王地山平左衛門は、相手の荒馬〈あらうま〉や追手風〈おってかぜ〉の巨体〈きょたい〉をみごとに土俵の外へ投げとばしました。「ワーツ、ワーツ。」という大歓声に、「丹波の相撲取りは強い。」「あんなもの人間かいな（だろうか）。」と、たいへんな評判でした。

これをきいた忠裕は、「それは、ふしぎじゃ。その者をすぐこれへ呼べ。」ということで、家来どもが、力士たちのとまっている宿をたずねていきました。

「お気の毒なことです、その人たちなら、今朝早く宿をたたれましたが…。」とのことで、さっそく東海道を早馬〈はやうま〉で追いかけたが、ついに見つかりませんでした。あとでしらべさせたら、丹波には、そんな力士はいないが、その名前がみな青山家領分のお稲荷さんがおまつりしてある地名だということがわかり、「さては、お殿さまをよろこばせようと、お稲荷さんたちが、化身〈けしん〉のきつねを江戸へ遣わされた〈つかわされた〉のだろう。」と、いうことになって、忠裕は、それぞれの稲荷神社へ感謝のまごころをこめたのぼりや絵馬〈えま〉を奉納〈ほうのう〉されました。

今、王地山にある「負けきらい稲荷神社」は、必勝祈願〈ひっしょうきがん〉の社〈やしろ〉として有名です。そして、そこには、「王地山、平左衛門稲荷」と記されて〈くるされて〉います。

また、この話をもっと古く松平忠国が藩主のときだったともいわれています。

さらに、もう一人谷山の稲荷さんからも行かれましたが、東海道静岡あたりで、急に足痛を起して残念にも引きかえされたといわれています。

今も、谷山稲荷神社には、大きなぞうりがお供えしてあり、足痛の時、おまいりするど霊験〈れいげん〉〈ききめ〉があるということです。

